

沖泊 港湾

石見銀山の歴史において沖泊は、銀山から国内外へと銀を出荷するための港として 2 番目に用いられた港でした。1562 年に毛利氏がこの地を完全に支配すると、毛利氏は石見銀山から日本海へと新たな道を開きました。この道の終着点であった沖泊は、商業港と海軍基地という 2 つの機能を果たしました。1570 年に港の入口に毛利氏が築いたとりでにより、沖泊からの銀の輸送と温泉津港までの供給経路の両方が守られ、道の終点地帯に沿って特徴的な長方形の土地区画の村ができました。しかし、17 世紀初頭に石見銀山が江戸を拠点とする新たな中央幕府（現在の東京）の支配下に入ると、銀の流れは海岸地方から離れ、陸路で尾道へ、そこから大阪へ、さらに都へと運ばれるようになりました。沖泊はひそかに漁村化しましたが、そのゆっくりとした衰退ゆえに、沖泊の歴史的な雰囲気はほとんど変わることがありませんでした。16 世紀につくられたこの村の区画はそのまま残されており、人々が海上の安全を祈願する神社が最近再建されました。沖泊港の端まで歩くと、かつてはとりでであった島々を見渡すことができます。また、柔らかい石を削って作られ、銀船の係留装置として用いられた 60 個余りの突き出た岩石層を目にすることができます。